

---

# かいな

矢岳秀斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かいな

### 【Nコード】

N1131N

### 【作者名】

矢岳秀斗

### 【あらすじ】

帰宅を急ぐ夜道、とつぜん目の前に飛び出してきた犬を見て、理沙は驚いてブレーキを踏んだ。だが、本当に驚いたのは、その犬が啜えているものだった。

腕……人間の、腕……

それは、十年前に聖也がなくなった右腕だろうか。

幸せだったはずの息子との生活は、音を立てて崩れ始めた。

## 第一話

突然、目の前に飛び出してきた犬を見て、理沙は思わずブレーキを踏んだ。

一瞬、甲高いスキール音が夜闇に響き渡る。前につんのめるような衝撃を感じ、白い軽自動車はぴたりと止まった。

数秒間、理沙はハンドルを握りしめたまま瞑った目を開くことができなかった。タイミングとしては、完全に間に合わないと思ったのだ。恐怖のために、体が震えている。

だが、いつまで待っても撥ねた衝撃はない。

(大丈夫、かな……)

理沙は恐る恐る前を見た。危うく轢くところだった。運良く止まったが、ブレーキを踏むのが数瞬遅かったら間に合わなかっただろう。しかし、危険を避けたにもかかわらず、理沙の口から安堵の吐息がもれることはなかった。「ひい！」と息を呑み、表情は驚愕に凍りつく。

理沙が本当に驚き、自分の目を疑ったもの。それは、犬が口に啜えているあるものだった。震える手でずり落ちた黒縁の眼鏡を直し、頬にかかった長い黒髪をかきあげる。

自宅まであと数キロに迫った、街灯もない暗い夜道。急ブレーキを踏んで止まった車の先に、灰色の大型犬がいる。犬も驚いたのか、道路の真ん中で立ち止まっていた。運転席の理沙に顔を向け、ヘッドライトに照らされた両の目がトパーズ色に光っている。

まるで餓えた狼のようにやせ細り、目つきは肉食獣のように鋭い。もう、何日も餌にありついていない野良犬だろうか。

だから

その先の言葉を、続けることができない。

それは、にわかには信じられない光景だった。理沙は何が起きているかもわからず、ぼかんと口を開けたまま目の前のものに見入っ

ていた。

(だから、こんなものを啜えているのね)

理沙は納得もできないまま、無理矢理ひとりごちる。野良犬が啜っていたもの。それはまぎれもない、人間の、腕だった。

まるで蠅人形のような白い腕。太さからして、子供か女性のものだろうか。少なくとも無骨な男性のものでないことは確かだった。

その腕は肘のあたりを啜えられ、手は何かを捨つように地面に向けられている。反対側の付け根は鋭い刃物で切られたような断面で、赤黒い肉の中に白い骨をのぞかせていた。

腕……人間の、腕。

それは、十年前になくした聖也の右腕だろうか。

正気が失せたようにぼんやりとしたまま、理沙は禍々(まがまが)しい事件の日に思いを馳(は)せた。

あの日のことは、今も鮮明に覚えている。

\*

「さあ聖也。保育園に行く時間よ」

ゴミの入った白いビニール袋を手に提げ、理沙は玄関先で一人息子の名前を呼んだ。

「はい」

紺の制服に身を包んだ聖也が、パタパタと足音を立てて駆け寄ってくる。その姿を見て、理沙はそっと目を細めた。小さな手を取り、玄関を出る。

十八で産んで、離婚して、女手ひとつで育ててきた聖也は、今年で六歳になる。仕事をしながらの子育ては大変だが、子供にだけは不自由な思いをさせたくない。

金銭的に自立しようと思んだ保険のセールスは順調だったし、日に日に成長していく息子の姿は、苦勞を吹き飛ばすほどの幸福感を与えてくれた。

来年、小学校に上がれば、こうして聖也の手を引いて保育園に送ってゆくこともなくなるのだろう。それは朝が少しだけ楽になる分、ちょっと寂しいことでもあった。

保育園に向かう途中で、数日の間に溜まったゴミを出す。今日は、週二回のゴミの回収日だった。しかし、いつも通り家を出たのに、なぜか今日はすでに収集車が来ている。

「大変！ 聖也、走るよ」

理沙は焦って駆けだしていった。つないでいた聖也の手を離したのは、半ば無意識だった。

「すみません。これもお願いします」

息を切らせながら、大きなゴミ袋を差し出す。夏の収集所は生ゴミが腐乱した臭いを撒き散らしており、理沙は思わず顔をしかめた。

「そこ置いといてよ」

無愛想な男の言葉に、理沙はもう一度「すみません」と謝り、袋を地面に置く。

と、そのとき

「ぎゃあああぁー！」

聞いたこともない凄まじい絶叫を耳にし、理沙は驚いて背後を振り返った。

「せ、聖也　！」

目前に広がる信じられない光景に、理沙は呆然として立ちつくした。そこには、収集車の回転板に右手を巻き込まれ、泣き叫ぶ聖也の姿があった。理沙の目の前で、収集車はまるで猛獣のように小さな体を食らおうとしている。骨が砕ける、鈍い音。

「聖也、聖也ぁー！」

理沙は半狂乱になりながら、ゴミと共に吸い込まれようとする子供の体を必死で引っ張った。だが、強大な力で引きずり込まれる小さな体は、人の力ではどうすることもできない。ゴミの腐臭にまみれ、聖也は白目をむき、口元からは泡を吹いている。

もう、間に合わないかもしれない　誰もがそう思う中、理沙だ

けはその体を手放さなかった。下手をすれば、自分も巻き込まれかねない危険な行為。『死なばもろとも』。言葉にすれば、そんな覚悟だったのだろう。

その思いが天に通じたのか、やがて「ブチン」とゴムが切れるような音がしたかと思うと、聖也の体は突然自由を取り戻した。

思いつきり引っ張っていたため、その勢いで後ろに倒れ、理沙はしたたかに背中を打つ。

それでも、理沙は打ちつけた痛みすら感じることもなく、鉄の野獣から息子を取り戻したことに、ほっと胸をなで下ろした。

「ああ、よかった……聖也、大丈夫？ せー」

だが次の瞬間、安堵の表情は再び驚愕に凍り付く。

「キヤアアアア！」

その絶叫は、先ほど聖也が発したものとどちらが大きかっただろうか。理沙の腕の中で、ぐったりと横たわる小さな体。その体は、まるで赤いシャワーを浴びたように血にまみれ、右腕は肩の付け根からなくなっていた。聖也の腕はどこにいつってしまったのか。

ふと見ると、収集車のテールゲートは鮮血に濡れている。そして鉄の野獣は満足したのか、ゴミを取り込むギシギシという金属音は、笑いを含んだように響き渡っていた。

\*

理沙の記憶はそこまでで、その後のことはよく覚えていない。あまりの衝撃に気が狂ってしまわぬように、脳が記憶を抹消することで自己防衛したのだろう。誰かが救急車を呼んで、聖也は病院に運ばれ、そして無事に手術は成功した。もっとも、失った右腕が戻ったわけではなかったが。

右腕を死神に捧げることで、聖也は一命を取り留めたのだ。

あれから十年

自分が目を離れた隙に起きた事故。その自責の念は、今も消える

ことがない。そんな気持ちがあやふやとなつて現れたのか、気がつくとな腕を啜えた犬は、理沙の視界から消えていた。ヘッドライトが照らす夜道は誰も通らず、左側は田んぼ、右側は神社である。暗くてよくわからなかったが、辺りを見回してみても、もう犬の姿はどこにもなかった。

神社の奥には、庭の木が鬱蒼と生い茂る廃屋があり、ひよつとしてそこが野犬の溜まり場になっているのかもしれない。そして……

（人間の死体を食べてる　？）

手足を食いちぎり、目玉をえぐり、息絶えた喉笛に牙を突き立てる。はらわたを引きずり出し、溢れる血を満足そうにする野犬の群れ。そんな光景を想像し、理沙はえずいた。

警察に通報した方がいいのだろうかと考えたが、それも否定する。いったい何と説明するのか。

（犬が腕を啜えているんです）

そんな話を誰が信じるのだろう。第一、目の当たりにした理沙自身信じられないのだ。

理沙は自らを落ち着けるように大きく息を吐くと、気を取り直してあとわずかの家路を急いだ。

## 第二話

自宅までの道のりは、まるで夢の中のようだった。

あの白い腕は、切断されてからどれだけ経っていたのだろう。腐敗もせず、犬が啗えるぐらだから、せいぜい昨日、今日ぐらいのものに違いない。マネキンではないはずだ。ヘッドライトに光る透明感のある爪や、虚空をつかむような生々しい手の造形は、どんな名工にも再現不可能のように思える。

そして、腕を啗えたまま、理沙を見つめていた犬。その目に憎悪の光が宿るのを見て取ったのは、ただの気のせいだったか。理沙は言いようのない不安に駆られ、いつもより深くアクセルを踏み込んだ。

やがて自宅の明かりが見えてくると、理沙はようやくやくほつと胸をなで下ろした。明かりがついているということは、息子の聖也が帰っている証拠である。

今年から高校生になった聖也は、帰りが遅くなることも多い。運動系の部活はできるはずもなかったが、頭もよくて友達も多く、楽しい高校生活を満喫しているようだった。障害があることでいじめられたり、引きこもってしまったらどうしようという母親の不安は、どうやら杞憂で終わりそうだった。

買い物袋を手に提げ、玄関の扉を開ける。聖也が先に帰るといつもそうしてくれているように、今日も明るい玄関ホールのダウンライトが温かく理沙を照らす。

本当に、優しく賢い子に育ってくれたものだと思う。親の不注意で右腕を失い、普通なら絶望感から自暴自棄に走ってしまうものだろうが、聖也は母親思いの優しい子だった。帰りの遅い母親を気遣い、いつも電気を付けて待っていてくれる。そう思うのは、決して親の欲目ばかりではないだろう。

近所で同じ年頃の子供を育てている、たとえば河合さんところの

厚志君は、もうまったく親の言うことなんて聞かないというし、聖也と仲のよい村上勇人君だって、怒らせると怖いから、母親は腫れ物にさわるように接しているという。

そんな同級生たちからくらべれば、聖也は歳のわりにずっと老成して落ち着いている。小さな頃から女の子と間違われるほど整った顔立ちで、銀縁眼鏡の奥の黒い瞳は深い知性に溢れていて、そう、伶俐という言葉がぴったり。まるで何かの物語に出てくる王子様のようだ。

片腕がないことが、よけいに倒錯めいていて美しい。ミロのヴィーナスや、阿修羅像など、不具の者だけが持つ美しさというのは確かにあるのだ。

自分の息子をそんなふうに思うのは、母親としておかしいのだろうか。ときにはそう考えなくてもなかつたが、その異常ともとれる愛情は、一生かかっても償えぬ事故の責任感を痛切に感じている裏返しなのだろう。

「母さん、お帰り。今日はちょっと早いね」

気がつくと、二階から降りてきた聖也が笑顔で迎えていた。細い顎筋に、十代の者だけが持つ艶やかな黒髪。いつものように眼鏡の奥の目は湛えられた優しさに細められ、帰宅した母を見ている。

白いシャツの右腕部分がひとつ縛られているのは、動作の邪魔にならないようにであったが、それはこの美しい少年が不具者であることを嫌が応にも証明していた。

理沙はまださっきの衝撃から抜けきらないのか、靴も脱がないままぼんやりと考えにふけってしまっていたようだった。我に返り、あわてて笑顔を浮かべる。

「ただいま。ごめん、おなか空いたね。すぐご飯にするから」

そう言つて、理沙はキッチンに駆け込んだ。聖也が女の子だったら夕飯の支度もしてくれるのかもしれないが、息子にそんなことを頼むことはできない。なにしろ、聖也は右腕がないのだ。

(私のせいで……)

腕を啞えた野良犬の映像が、またも脳裏をよぎる。それを振り払うように頭を振ると、理沙は今度こそ夕食の準備にとりかかった。

聖也と共に二人っきりの夕食をとりはじめたのは、八時を過ぎていた。今日はたまたま理沙の帰りが早かったが、遅いときは九時近くになるときもある。ただ、どれほど遅くなっても食事は二人で食べるのが暗黙の了解だったし、理沙にとっては主婦と仕事という休む暇もない毎日が報われる、唯一の時間でもあった。

息子も出来がよく、自分はなんと立派な母親なのだろうと、理沙は自画自賛する。父親がいなくとも金銭的にも自立し、聖也を育て、取り返しのつかない事故はあつたけれども 誰かが褒めてくれることがあつてもいいのじゃないだろうか。誰も褒めてくれないのなら、せめて自分で自分を認めてあげることが許されるだろう。

(それに……)

味噌汁の入った椀に口を付けながら、理沙はダイニング・テーブルの向かいに座る聖也をそっと見やった。

(私は幸せなのだ)

育て上げた息子を見るたびに、胸に溢れる満足感と幸福感。父親もなく、たつた二人で暮らしてきたことがかえって幸いしたのかも知れない。聖也には兄弟もなく、頼るべき肉親は、母親である理沙しかないのだ。

今日、学校であつたことや他愛のないテレビ番組のこと。K……という女優がかわいいという聖也に、「趣味が悪い」とつまらぬケンカをしたこともあつたし、高校受験の時だって、聖也と一緒に悩み、一生懸命応援したのだ。聖也とは何でも話し合える、今どきめずらしいくらい仲のよい親子だと思う。

もし、娘であれば同じ女性として話せることもたくさんあつたかもしれないが、いずれ結婚してしまえば家を出ていってしまう。そうすれば、理沙は一人で寂しい老後を過ごすはめになったのだろう。その点、男である聖也はずっと自分のそばにいるはずだし、結婚

したって、母親思いの息子は同居してくれるに違いない。聖也が連れてくるお嫁さんなら、きつとおとなしい、いい子だろう。姑として、うまくやっていける自信もある。早ければ、あと十年もしないうちに孫ができて、お婆ちゃんになるのだ。

そんなこれからの幸福な生活を思うと、やはり男の子を産んでおいてよかったと理沙は安堵するのだった。

母親になったのは十八歳と早かったが、その分、楽になるのも早い。理沙はまだ三十四歳でしかなくて、それは聖也にとっても「若い綺麗なお母さん」という自慢でもあるだろう。

事実、保険のセールスで外回りをしている理沙は、実際の年齢よりずっと若く見られたし、聖也と並んで歩いていると年上の彼女と間違われることもあった。

そんなとき、理沙は湧き上がる喜びをかみしめながら否定するのだが、聖也だってまんざらではないような笑顔を浮かべたのだ。

「……でさ、勇人の奴が　母さん、ねえ、聞いてる？」  
「え……？」

ふと気がつく、聖也が訝しんだようすで理沙の顔を見ていた。

「ああ、ごめんね。ぼんやりしちゃって。ええっと、何の話だっけ」

「もういいよ」

聖也は別段、怒ったふうでもなく答えた。

「どうでもいい話だし。それより、帰ってきたときから顔色悪いよ。疲れてるんじゃないの？」

「そうかな」

疲れている自覚はなかったが、理沙はそう言って笑ってみせた。息子と過ごす貴重な時間にぼうつとしてしまい、あるうことか話を聞いていなかった。理沙は罪悪感を感じ、その表情を曇らせた。

「洗い物はぼくがやるからさ。母さんは休んでよ」

聖也は屈託のない笑いを浮かべると、理沙が止めるのもきかず、左手だけで食器を積んでシンクへと運ぶ。

そして慣れた手つきでスポンジを握ると、片手だけで器用に皿を洗い始めた。そんな聖也の後ろ姿を、理沙は複雑な表情で眺める。

（聖也は本当に、優しくて、賢くて　　）

非の打ち所がないとは、こういうことを言うのだろうか。それは、他人が聞けば親バカでしかないだろう。

（これでもし、右腕があれば……）

聖也の未来は、どれほど開けたものだったのだろうか。帰り道に見た、犬が啜える白い腕。もし、あの腕を聖也にあげることができたなら。理沙は一人うそぶき、ため息をついた。

聖也が完璧であればあるほど、十年前のあの事故は理沙の自責の念と後悔を増長させるのだった。

### 第三話

一日のうちで一番満ち足りた時間であるはずの夕食は、あっという間に終わってしまった。後片付けを終えた聖也は勉強があるからと自室に行ってしまった、理沙は一人でぼんやりとダイニングの椅子にもたれていた。

県内でも有数の進学校に通う聖也は、勉強が忙しい。思えば共に食事をするこの三十分以外、聖也の顔を見ることはないのだ。

たった三十分の幸福。

(なんだか……)

母親なんて、つまらない。

ふと、そんな徒労感が理沙を襲う。ついさっきまで聖也の顔を見ていたときは、あれほど幸福をかみしめていたのに。　こんなことは初めてだった。理沙は自分自身に驚き、ぼんやりと虚空に目を向けた。

つけっぱなしのテレビは、旬の芸人たちがネタを披露し、爆笑の渦が巻き起こっている。だが、理沙はそれにもいかなる反応もみせない。テレビを観ても面白くない。とくに最近のお笑いは、まったく理解ができないでいた。男性アイドルグループは、A……以降、区別がつかないし、だいたいテレビに出てくる若い子は、あまり見分けがつかない。

二十代の頃は、そんなふうに言う親たちを馬鹿にしたものだが、気がつけば自分もそうなりつつあることに、理沙は愕然とした気持ちになった。

(いつからそんなふうになってしまったのだろう。　私は、何が楽しくて生きてるんだろう)

なぜ、そんなことを考えるのか。

(やっぱり、疲れてるのかな?)

(聖也が言うように)

(聖也?)

自分のせいで片腕を失った、最愛の息子。ようやく十六歳になる、理沙の生き甲斐。そして全ての……

(なんだか、疲れたわ。)

理沙は眼鏡を外して傍らに置くと、テーブルに突っ伏し、そのまま寝入ってしまった。

……

次に目を覚ましたとき、理沙は一瞬、自分がどこにいるのかわからなかった。シーリングライトの光りは無機質に部屋を照らし、電源が入ったままのテレビは、観たこともない深夜バラエティをやっているようだった。

極度の近眼である理沙は、眼鏡がないと何も見えない。外した黒縁眼鏡をかけ、二、三度目をしばたたかせる。

壁の時計に目をやると、一時　すでに日付の変わった、午前一時を指していた。こんなところで四時間も寝てしまったのか。理沙は愕然として立ち上がる。風呂に入っていないどころか、化粧も落としていない。

聖也はまだ風呂に入っていないのだろうか。いや、入ったに決まっている。そうして、もう寝てしまっているだろう。

(起こしてくれたっていいのに……)

苛立ちが舌打ちとなって出る。理沙はため息をついて立ち上がると、着替えを取りに寝室へと向かった。本当は顔を洗うのもおっくうだったが、このまま寝るわけにもいかなかった。

暗い廊下を歩き、寝室の木戸を開ける。手探りで電気のスวิตช์を探り、それを押した。

青白い点滅の後、白い蛍光灯に照らされる室内。右の壁は備え付けのクローゼット、左に広がる八畳の洋室には、セミ・ダブルの木製ベッドとナイトテーブルがあるだけの、シンプルなしつらえだった。

ナイトテーブルの上には小さな時計と、カップに植えられた観葉

植物。ベッドに敷かれた白いリネンが目眩しい……はずだった。

「？」

理沙はその、ベッドの上に置かれたものを見て目を疑った。信じられず、かけた眼鏡のずれを直す。白いシーツに広がる、赤黒いシミ。そしてその上にあるのは、『腕』だった。たった今切り取ったと言わんばかりの、真っ白い人間の腕。天井から落ちる何かを受け取るように、手のひらは上に向けられている。

だが、人はあまりにありうべからざるものを目の当たりにすると驚くことさえ忘れてしまいうらしい。自分が眠るはずのベッドに置かれた『腕』。そんなものを見たところで、にわかには信じられる者はいないだろう。

理沙はなぜか忍び足でそっと近づくと、『腕』をまじまじと眺めた。それは、明らかに若い女性の右腕だった。形のいい爪はピンク色に塗られ、血の気の失せた白い腕によく映えている。装飾品は何もないが、さぞかしダイヤのプラチナリングがよく似合うだろう。薬指なら、まちがいでなく七号のリングがはまる、細い指。

手首も細く、肘で軽く折れた腕は、肩の部分ですっぱりと切られていた。その断面はシーツに広がるシミと同じように赤黒い。中央に白い骨がのぞき、周りにはストローぐらいの太さの血管や、黄色っぽい筋　おそらく神経だろう　が見て取れる。

理沙は猛烈な喉の渇きを覚えつつも、まるで魅入られたように『腕』から目が離せないでいた。事態を把握しながら、目の前の光景に現実感がない。理沙は震える手をそっと差しのべ、『腕』の指先に触れた。

さわった瞬間、思わずその手を引っ込める。水とも、氷ともつかぬ、死者特有の何とも言えない冷たさ。　今さらながらに、理沙は全ての状況を理解した。

次の瞬間、理沙は先ほど食べた夕食を『腕』の上に嘔吐した。

## 第四話

警察の現場検証が終わったとき、外は遅い冬の夜明けが訪れようとしていた。

すがすがしい、冷えた空気。だが、そんな澄んだ外気とはうらはらに、理沙の表情はやつれ、青ざめていた。近所から向けられる好奇の目と、謂われのない誹謗から逃れるように、よろめく足取りで玄関の戸を閉める。

「母さん、大丈夫？」

廊下に立つ聖也が、心配そうに聞いた。深夜に警察が駆けつけてからは家の中は大変な騒ぎになり、任意で取り調べを受けた聖也も一睡もしていない。だが、やはり若さのせいか、彼に疲労の色は見えなかった。

「ええ、大丈夫よ。さすがに仕事はお休みするけど。聖也はどうするの？」

「学校は行くよ。ぼくが家にいても、これ以上できることは何もないのだし」

聖也の言葉に、理沙は「そう」と答え、力なくため息をついた。確かに聖也がいても、できることはない。警察が調べた限りでは、家の中に死体があるわけでもなかったし、どうして切断された腕があったのか、誰が、何のために運んだのかはついにわからなかった。それでも いや、だからこそ聖也には一緒にいてほしかったのだ。こんな猟奇的な事件が起きた家で、たった一人で過ごすのは不安で仕方がなかった。だが、聖也を引き留めることはできない。

理沙はだるい体を引きずりながら、キッチンに立った。お湯を沸かし、パンをトースターに入れる。

聖也はいつも、あまり朝食を摂らない。もともと食が細く、育ち盛りのわりには鳥の餌ほどしか食べなかった。さすがに今日は夜通し起きていたせいも、トーストにコーヒーマ、ダメ元で作った目玉焼

きまで平らげていったが、それは本当に珍しいことだった。

短時間の間に簡単に作った弁当を渡し、いつも通り聖也を登校させる。すると、理沙は言いようのない疲労感に襲われ、昨夜と同じようにダイニング・チェアに腰を下ろしてしまった。

もう、立ち上がれないほどの疲れを感じていたが、気が立っているせいか、眠たくなる気配はない。突然狂い始めた幸せな日常思い起こせば、それは帰宅途中に見たあの犬……正確には、犬の啜えていた『腕』を見たときからだっただろうか。

だが、寝室にあった『腕』を目の当たりにした今となっては、一瞬見ただけの犬のことは夢の中のできごとのように思える。

それは結局警察に言うこともなかったし、聖也に話すこともなかった。隠すつもりもなかったが、ベッドの上の『腕』の衝撃が強かった。今思い出すまでは完全に忘れていたのだ。

(どちみち、話したところで誰も信じてくれないでしょうけど……)

理沙は椅子に座ったままため息をつき、これからのことを考え始めた。

こんな事件があったあとでは、もう、あのベッドは使う気にならない。それどころか、寝室に入ること自体も嫌だったし、もつと言えばこの家にも居たくはなかった。金銭的な問題と、聖也が高校生ということもあってすぐに引越すするわけにもいかなかったが、とりあえずベッドだけは早いうちに処分しようと思っている。

(ということは、新しい布団を買ってこなくちゃ)

それも今日中に。

(面倒くさい……)

やるべきことは他にあるだろうか？ 理沙は考えを巡らせた。が、疲れているせいか何も思いつかなかった。本当は『腕』は誰が、何のために置いたのか、それどころかあれは誰の『腕』なのか、考えなければならぬことはたくさんあったが、とにかく今はゆっくり休みたい気持ちの方が強い。

理沙は鉛のように重い体を引きずり、バスルームへと向かう。思えば六時間前に風呂に入ろうとして、この事件のせいで入れずじま  
いだった。

熱いお湯につかってようやく人心地がつくと、今頃になって睡魔  
が襲った。だが、あの寝室で眠る気にはなれなかったし、テーブル  
に突っ伏して寝るのも限界だった。理沙はためらいつつも二階へと  
上がり、聖也の部屋に足を踏み入れた。

（この部屋に入るのは、何年ぶりだろう……）

思えば聖也が中学生になった頃から、声を掛けるためにのぞくこ  
とはあつても入ったことはない。理沙が部屋に入ると、聖也は冷や  
やかな目で理沙を見て、それは子供とはいえ本当にぞつとするよ  
うに冷たく、そんな目で見られるくらいなら、いっそ激昂のままに  
暴れてくれた方がましだと思っくらいだった。そうして

「もう、子供じゃないんだからさ。人の部屋に勝手に入らないで  
よ」

と、胸の奥に燃え立つ青白い憤怒の炎をひた隠すように、静かに  
言つてのけるのだった。

実の息子でありながらそれは本当に恐ろしく、普段優しい聖也が  
どうしてそんなふうになってしまふのか、最初は怒りと情けなさで、  
半狂乱になって泣きわめいた。聖也が突然見知らぬ他人になってし  
まったような気がしたのだ。

聖也と仲の良い勇人君のお母さん、村上さんに相談したときには、  
彼女はなんとなく、秘めるような笑いと共に言った。

「そりゃあ、中学生にもなったら親に見られたくないものだって  
あるんじゃないの？ それが反抗期つてもよ。いいじゃない。ち  
やんと正しく成長してる証拠よ」

村上さんの目に宿る光は言葉に出来ぬ淫靡なものが含まれており、  
それで彼女の言わんとすることが理沙もようやく理解したのだが、  
それは頭ではわかつていても、母親としてはなかなか受け入れられ  
ないことでもあった。あの、少女のように白皙はくせきで、伶俐で、右腕が

ないことと相まって、理沙が愛情の全てを捧げずにはいられないほど可愛かった聖也が『男』になってゆくこと。

それはまるで、小鳥の卵と思って温めていたものが、孵ってみたら得体の知れぬ化け物だったという物語のように、驚きとまどいがつまでも理沙の胸中に渦巻いていた。

しかし、さいわい聖也は潔癖に近いぐらいまめに掃除もしているようだったし、その一件があつてからは、理沙は言われるとおり聖也の部屋に入ったことはなかった。

久しぶりの入室に感慨にも近いものを感じ、部屋の隅々を見渡す。理沙の身長よりも高い壁の本棚には、参考書や辞書、漫画と、それを上回るたくさん的小説がある。理沙自身は読書の習慣もなく、その蔵書量にただ感心するばかりだ。

机の上はきちんと整理されており、黒いノートパソコンが置かれていた。パソコンも理沙にはよくわからないもののひとつで、職場で使うことはあつたけれども 聖也がいつも夢中になってその画面を見ている姿は、いまいち理解できぬ苛立ちと、もっと正直に言ってしまうえば、自分から離れてゆく寂しさを感じるのだった。

理沙はベッドに腰を下ろすと、そのままごろりと横になった。こんなところで寝たと聖也が知ったら、また快く思わないかもしれないが、あんな事件の直後である。眠る場所がないのは聖也も知っているし、これぐらいは許されるだろう。

シーツは嗅ぎなれぬ、聖也の匂いがした。だが、それは昔を懐かしむような幼い頃特有の乳臭さではなく、理沙の知らない男の匂いだった。

やりきれぬ気持ちを吐露するように息を吐くと、理沙はそのまま深い眠りへと落ちていった。

## 第五話

理沙が目を覚ましたとき、目に映ったのは見慣れぬ部屋の天井だった。慌てて起き上がり、ここが聖也の部屋だと気づく。

ゆっくりとベッドを降りてカーテンを開けると、空はどんよりとした灰色の雲が覆い尽くしていた。理沙の頭はそんな天気のように重く、鈍痛を感じていた。中途半端に寝たためか、さわやかな目覚めとは言い難い。

（頭が重いし、それに、寒い……）

理沙は自分の体を抱きすくめるように腕を回し、肩を震わせた。なんだか毎日があわただしくて気にしたこともなかったが、誰もいない家というのは空寒く、静かだった。

壁の時計を見ると、すでに昼近い。普段だったら仕事をしている時間で、平日のこんな時間に家にいることは、罪悪感と、まるで社会から取り残されたような孤独感が入り交じった、奇妙な気分だった。

乱れた布団を直し、部屋を出ようとする。

が、思いとどまって理沙は足を止めた。もう、次はいつ入れるかもわからない聖也の部屋。室内を眺めながら、ある種の感慨深さと同時に、背徳的な興奮をもかき立てられていることに理沙は気づいた。

年頃の男としては、異常なまでに綺麗に片付けられた部屋。理沙は大量の本が並ぶ本棚の前に立った。理沙の身長よりも高い本棚には、上の方に参考書や問題集が並び、目線の棚からは、小説や漫画であろう、様々な本が詰まっている。

「本棚を見ればその人がわかる」とは、誰の言葉だっただろうか。だが、読書の習慣のない理沙には、背表紙に書かれたタイトルを見ても、それがどんな内容なのかはわからない。

（聖也は、どんな本を読んでいるのだろう）

それは、聖也の心の聖域までもをのぞくようならめたさがあったが、最終的にはその好奇心を抑えることはできなかった。

ちょうど目の前に並んでいる本の中から、黒い表紙の一冊を取り出す。パラパラとページをめくると、それが漫画であることに理沙は一瞬軽い失望を覚えたが、描かれている絵を見て思わず目を見張った。

内容、ストーリーはよくわからない。だが、そこに描かれている絵はあまりに衝撃的だった。四肢を切断され、まるで芋虫のような体になった女性が風呂場に浮かんでいる。切断された四肢はベルトで縛られ、描かれる出血量は不自然に少ない。残酷な運命に驚愕し、虚ろな表情で虚空を見る目が印象的だった。しかもそれは死体ではなく、その状態で「生きて」いるのだ。

それは、片腕をなくした聖也なら、もつとも忌み嫌うものではないのか。残酷なものに惹かれる人間は決して少なくはないのだろうが、聖也がその一人だというのはどうしても信じられない。

漫画とはいえ、いたって健全な精神の持ち主である理沙にはあまりにショックが大きかったし、実際に聖也の右腕をなくす現場を目の当たりにした彼女にとっては、こういうことを考える人間がいるのだと思うこと自体、激しい嫌悪に襲われた。

しかし、震える手はそのページを開いたまま、目は釘付けになっている。見たくないと思う一方で、それはどうしても昨夜の事件を連想させた。

あの腕を切られた人間は、この絵みたいに芋虫のような体になっっているのだろうか。

自らが繰り返す浅い呼吸が、やけに大きく聞こえた。

ブルブルルル !

突如鳴り響く電話の着信音が、静寂を破る。

理沙は仰天して、文字通り飛び上がった。危うく落としかけた本

を、あわてて本棚に戻す。だが、それでようやく現実を引き戻されたような気がして、理沙は安堵しながら階下へと駆けだしていった。けたたましく鳴り響く電話を取ろうとして、理沙は眉をひそめた。液晶のナンバーディスプレイには『非通知』の文字がある。たいてい『非通知』で掛けてくるのはテレアポのセールスだったり、いたずら電話だったりとするものではない。

出るのをやめようかと思ったが、電話はなかなか鳴りやまず、理沙は仕方なく受話器を取った。

「はい、水谷です」

「……」

「もしもし？」

「……」

「あの、どちら様でしょうか？」

「……」

再三の呼びかけにも、相手は応じようとしなない。やはりいたずら電話のようだった。しかし、すぐに切ってしまうのも癪に障り、理沙は受話器の向こうの相手を探るように息を潜めた。

受話器の向こうで風の音が聞こえる。建物ではなく、外から掛けているのだろう。車を通る音、そして、けたたましい警笛とともに電車が走り抜ける音が聞こえた。

「……！」

その音に紛れ、相手が何か言っている。だが、騒音がひどくて聞き取れない。

「え　？　もしもし、よく聞こえないんですけど。もしもし」

「……」

理沙の問いかけに返答はなく、ブツリという音と共に、電話は一方的に切れた。啞然として受話器を見つめる。本来なら激しい怒りを感じるところだったが、昨夜の奇妙な事件のこともあり、理沙は戦慄を覚えた。

ひょっとして、昨夜の犯人がこの家の状況を探っているのかもし

れない。理沙がたった一人でいることを知れば、次の犠牲者として彼女に白羽の矢を立てることも充分考えられる。

理沙は荒々しく受話器を叩き置くと、ことさら足音を響かせて廊下を歩いた。冷えた空気に染み渡る静寂には、もう耐えられなかった。死体が発見されていないとはいえ、片腕が放り込まれた家の中は、心なしか怨念のような気配と血なまぐさい臭いが漂っている。

そんな家から逃れるように、理沙は着替えをすませると、足早に家を出た。戸締まりを厳重に確認することは忘れなかった。

車に乗って走り出すと、理沙はいくぶん落ち着きを取り戻していた。あんな電話に怯え、急いで家を出たのが腹立たしい。相手は名乗ることも、犯行予告もできない臆病者で、それはひよっとすると昨夜の騒ぎを聞きつけた近所の人が、面白半分に掛けてきたいたずら電話かもしれないのだ。

(いや、きつとそうに決まっているわ)

不具を抱える子供がいる家に、切断された片腕が放り込まれる。

それは、なんて皮肉めいた事件だろう。

こんな田舎町では、ただでさえシングルマザーというのは好奇の目で見られたし、聖也は隻腕ということを差し引いても人目を惹く少年で、そんな家庭に降ってわいた昨夜の災難は、口さがない主婦たちの格好の餌食になるのに違いないのだ。

そう思うと、今度は聖也のことが心配になる。あんな不可解な出来事があった家で、今日もたったひとりで自分の帰りを待たせてしまうことに罪悪感がつのった。

(なんだか、私は聖也に謝らなければならないことばかり……)

理沙はハンドルを握ったまま、大きくため息をついた。いつの間にか、聖也に対してはうしろめたさと罪悪感ばかりがある。それは、自分の不注意で聖也が右腕を失って以来、ずっと心にわだかまっている感情だった。

鉛色の空のように、理沙の心が晴れることはなかった。

そんな理沙の重い気分には追い打ちをかけるように、車はいつの間にか狂い始めた日常のきっかけとなった道を走っていた。

幹線道路に出るために、どうしても通らねばならない田んぼ道。

それは昨日、帰宅途中に、腕を啞えた犬に遭遇した場所だった。街灯もなく、日が暮れると真っ暗な闇に包まれるこの辺りも、昼間はとりたてて恐怖を感じることもない。

今となれば、『腕を啞えた野良犬』というありうべからざるものを見たのは、夢としか思えなかった。

細い道路の左右に広がるのは、数ヶ月後の田植えを待つ荒れた田んぼで、木枯らしが待っている。左側の田んぼの中には、まるで孤島のように赤い鳥居の神社があり、その神社の裏には、長い間空き屋となっている古い家が建っていた。

それは近所でも、お化け屋敷と噂される廃家だった。所々瓦が割れ、壁は朽ち、今にも潰れそうなほどくたびれている。

車窓からその家を眺めていた理沙は、背筋にぞっとするものを感じて思わず身を震わせた。

神社の裏にある廃屋だけは、手入れもされず、鬱蒼と伸びる暗い木々に囲まれ、昼間でも障気を発しているように見える。それを目の当たりにすると、なぜか理沙はえもいわれぬ悪寒を感じ、昨日見た腕を啞えて歩く犬は夢ではなく、確かに現実だったと確信するのだった。

## 第六話

理沙は昨日と同じく、その場から逃れるようにアクセルを踏み込んだ。バックミラーで振り返ることもなく、国道へと出る。

夕飯の材料以外にも、使い物にならなくなったベッドの代わりに布団一式を買わねばならず、理沙は二十分ほどの距離にあるデパートへと足を運んだ。そこは保険のセールスという仕事柄、季節の折にお中元やお歳暮を買いに訪れているところだった。

もつとも、そんなものを渡すのは、高額な掛け金を支払い続けるごく一部のお得意さんに限られているのだが。

終わりの見えない不況のせいか、それとも平日の昼間という時間帯のためか、店内はお客も少なく、閑散としている。普段あわただしい毎日を過ごす理沙にとって、こうしてのんびりと店内を散策するのは何にも代え難い贅沢な時間で、そんな寸暇を楽しむように、最上階の寝具売り場へと向かう途中の婦人服売り場をゆっくりと見て歩いていた。

「水谷さん！」

不意に声をかけられ、理沙は驚いて振り返った。

「ああ、やっぱり水谷さんじゃないの。久しぶりねえ」

嬉しそうに近寄ってきたのは、聖也と同級生の勇人君の母、村上むら絵里子かみえりこだった。

もうすっかり中年太りの巨体は、理沙よりも十歳上という実際の年齢よりもずっと年老いて見える。それはぶつぷりと切りそろえたおかつぱの髪型のせいでもあったし、派手な花柄のジャケットに口ングスカート、それに「高級ブランド」というだけでまったく服装と釣り合わないハンドバッグ、といういでたちのせいでもあった。

「こんにちは。こんなところで会うなんて奇遇ですね」

理沙は愛想良く、顔に満面の笑みを浮かべる。その一方で、せつかくくつろげる時間であったはずのところ、に思わぬ邪魔が入ったことは、理沙の気持ちをかなり滅入らせた。

絵里子はずっと専業主婦で、シングルマザーの理沙とは「子供が同級生」という以外、共通の話題も、お互いを解り合えるわけでもなかった。しかし、絵里子の旦那は理沙の保険に加入している「お客様」であり、無愛想な態度をとるわけにもいかない。

理沙は心の中でため息をつきつつ、「よかつたらお茶でも」と、社交辞令を口にする。

見るからに暇をもてあましている絵里子はその誘いを断るはずもなく、二人は三階の一角にある喫茶店『ビコーズ』へと入っていった。

店内は四人掛けのテーブル席が三つ、カウンター席が四つということごんまりとしたところだったが、他に客は誰もいない。窓際のテーブルに着き、理沙はホットコーヒーを、絵里子はミルクティーを注文する。

「水谷さん、めずらしいじゃないの。平日のこんな時間に、こんなところにいるなんて。見たところ仕事じゃないみたいだけど、今日はお休みなの？」

目ざとく、絵里子が聞いてきた。理沙が仕事るときはいつもスーツで、今日のようにジーパンにピンクのセーター、白のジャケットといういでたちは、どう見ても仕事ではないだろう。絵里子の言うとおり、平日の昼間にこんな格好でこんな場所にいるのは、たしかにめずらしいことだった。

「ええ、まあ……」

曖昧な表情と返事をしつつ、どこまでを話そうか逡巡する。だが、同じ町内に住む絵里子には、理沙の家で起こった事件が耳にはいるのも時間の問題だろう。ここでへたに隠し事をすれば、絵里子の耳に入った事件の話は、どれほどの尾ひれをつけて伝わっていくかわかったものではない。

理沙は昨夜の出来事を、かいつまんで話し始めた。

その残酷な事件は、えらく絵里子の興味を惹いたようで、彼女は細い目を見開き、大仰に驚いて聞き入っていた。

「へえ……悪趣味っていうか、不思議な事件よねえ。切られた腕があるなら、腕のない体はどこにあるんでしょうね。生きてるのかな、もう死んでるのかな。ひょっとしてバラバラ死体？ いやあ！ 見たくないわ、そんなの」

拒絶の言葉とは反対に、その口調はなぜか嬉しそうだった。平和な田舎町に起きた、まるでミステリー小説のような奇怪で派手な事件。いくら身近な人に降って湧いた災難とはいえ、絵里子にとってはしよせん人ごと、退屈しのぎの話題でしかないのだろう。

理沙は啞然とし、続いて絵里子の無神経さに腹を立てながら、睨むように彼女を見た。

そんな理沙の視線に気づいたのか、絵里子はあわててまじめな顔を作ってみせる。

「それにしても いったい何のためにそんなことしたのかしら。怖がらせるだけなら、犬や猫の死体だっていいのに」

気を取り直し、取り繕うように発した絵里子の言葉に、理沙ははっとして彼女の顔を見た。

「よりによつて人間の腕なんて。こんなことを言うのはあれだけど、なんだか聖也君への当てつけみたいじゃない。これはきつと、犯人からの何らかのメッセージとか ごめんなさい、サスペンスドラマの見すぎかしら」

絵里子はそう言って再び笑ったが、理沙は自分の手がじつとりと汗ばむのを感じていた。

(そう、どうして……)

どうして『腕』だったのだろう。絵里子が言うように、ただのいたずらや嫌がらせなら、もっと他に方法はあるのだ。警察が動き、わざわざ捕まるリスクを冒してまで、なぜ犯人は『腕』を置いていったのか。

「そ、そうですね。本当に、そんなことをして誰が得をするんでしょうね」

自分の顔が引きつっていることを自覚しながら、笑ってみせる。

「それに、人が侵入した形跡もなかったんでしょう？　じゃあ犯人は……」

絵里子は言いかけて、後に続く言葉を飲み込んだ。

「ずっと家の中に潜んでたのかな」

「……」

「まあ、わたしが思いつく程度のこととは真つ先に警察が調べてるでしょうし、素人があだこうだ言っただって仕方ないわね。どうせ『切断された腕』なんて決定的な証拠があるんですもの、犯人が捕まるのは時間の問題よね」

そう言っつて、絵里子はミルクティーの入ったカップを口に運んだ。理沙は呆然としたまま、今の会話を反芻してみる。

（怖がらせるだけなら、犬や猫の死体だっていいのに）

（そんなことをして誰が得をするんでしょうね）

（ずっと家の中に潜んでたのかな……）

なんとなく、物事の核心に迫りつつある予感。理沙はだらしなく口を開いたまま、ぼんやりと宙に視線を漂わせていた。

「　　さん、水谷さん」

自分呼びかける声に気づき、はっとする。

「え？」

「どうしちゃったの？　ぼんやりして」

「ああ、ごめんなさい。なんだか寝不足で……」

「そりゃあ寝られないわよねえ。そんな事件が起きた日には　　」  
「　　」

「まあ、聖也君も子供じゃないんだし、いざというときには頼りがいがあるんじゃない。本当に、こういうときは男の子を産んでおいて良かったって思うわよね」

隻腕の聖也が、「いざというとき」にどれほどのことができるか

いっただろう。絵里子から滲み出る悪意を感じたのは、理沙の気のせいだっただろうか。そうして、彼女の目に宿ったままの好奇の色も。

理沙は無言のまま、ゆっくりとコーヒーをすする。それはすでにぬるく、強くなりすぎた酸味と苦みだけが舌を刺激した。頭から離れない、血塗られたベッドに転がる冷たい『腕』。不味いコーヒーは、理沙に血の味を連想させた。

その後は、村上さんの話はほとんど理沙の耳に入ってこなかった。唯一の共通の話題とも言える、学校や子供のことを喋っていたようだが、理沙は、適当な相づちを打ちながら、自分の考えに耽つてしまっていた。

絵里子はそれをどうとったのか、長話が大好きなはずの彼女にしては珍しく、

「そろそろ行きましょうか」と、早々に席を立った。

気分を害させた、悪いことをしたと感じていたのはお互い様だろう。しかし、喫茶店を出て絵里子と別れると、理沙はほっとすると同時に、言い得ぬ心細さを感じていた。

## 第七話

なんだか、この世にたったひとり残されてしまったかのような孤独感

それは子供の頃に味わった、たくさんの友達と公園で遊んでいたのに、夕暮れが迫ってくると、ひとり、またひとりと帰ってゆく、あの何とも言えない心細さだった。

もうすぐご飯よ。帰ってらっしゃい！

お母さんに呼ばれて、駆けだしていく友達。

理沙ちゃん、ばいばい。また明日ね。

うん、また明日。

約束して、その背中を見送るときの寂しさ。夕焼けをバックに母親に手を引かれ、楽しそうに帰ってゆく姿は、まるで影絵のようである。

そうして、公園に最後まで残っているのはいつも理沙だった。黄昏に包まれる公園で、さっきまでお友達と作っていた砂山を飽きることなくいじって……

遠くで鳴る、神社の鐘とカラスの鳴き声。

ゴォーン、

ゴォーン

カア、カア……

夕闇の中にこだまするそれは、耳を塞ぎなくなるほどの虚無感なのに、あの、鬼の住まう暗い家にはどうしても帰りたくなかったのだ。

理沙が育った家は母子家庭だった。

母は自分たちを捨てていった父を恨み、救いの手を求めても疎ましがる親戚を恨み、そのすべてを理沙のせいにして、いつも怒っていた。自分だけが不幸で、貧乏くじで、この世の全てを呪い、おそろしく心休まるときは一刻もないままに毎日を過ごして、そうして、

母は壊れてしまった。

ほうれ、あんなところからこつちを見ておる。毎日、毎日、あいつは私らを見て笑っておるんじゃ。

まるで地獄の底から呻くようなしわがれた声で言い、震える手で指さす薄汚れた部屋の壁には、当然ながら誰もいない。

この家は悪霊に取り憑かれておるんじゃ。私らがこんな目に遭うのはみいんな悪霊のせいなんじゃ。

訳のわからないことを言い始め、ある日、理沙が帰宅すると玄関には安っぽい壺があった。

この壺があれば、悪霊たちを封じ込めてくれる。

まるでほしいおもちゃを手に入れた子供のように、母はにんまりと笑ってその壺を抱き寄せた。

おお、あのときのぞつとするような笑顔！ 人の話を疑いもせず、考えようとせず、無知で、馬鹿で、そのせいで散々裏切られてきたというのに！

理沙が何を言っても、母はもう聞く耳を持たなかった。その壺を大事に大事に抱え、無理に取り上げようとすると、母は髪を振り乱して狂ったように怒った。

そのときすでに、母の瞳はこの世のものを映してはいなかったに違いない。こんなはずじゃなかったと吐き捨てられる呪詛の言葉は、いつの間にか自分自身を呪うことになっていったのだ。死んだ金魚のように光を失い、混濁した目は、妄想の中でつかみ取った幸福を見ていたのだろうか。

理沙にとつて、母親は家に住まう鬼だった。新興宗教にはまっぴら以来、ひっきりなしに焚かれる香は、閉め切られた家中の空気に染み渡る。そして、その醜<sup>す</sup>えた臭いの中で、聞いたこともない念仏を唱え続ける、見知らぬ妖怪へと変わり果てた母。狂気に支配された母が怖くて怖くて、理沙はそんな恐怖よりは、孤独に耐えることの方がずつとまじだったのだ。

……

どうして、そんなことを思い出してしまったのだろう。どうして、孤独だなんて思ったのだろう。

いつの間にか、ぼんやりと物思いに耽ってしまった。喫茶店を出たところで立ち止まっている理沙を、店員が訝しげな眼差しを投げかけてゆく。理沙は思わずうつむき、足早にその場を逃れた。禍々（まがまが）しい思い出を打ち消し、気を取り直してエスカレーターに乗る。

（私には、聖也がいるのに……）

最愛の、一人息子

そう思った瞬間、理沙は足元に冷気を感じてぎよつとした。暖房が効いているのに、突然感じた冷たい風。それはまるで、死者の手で足首をつかまれたような、言い知れぬ冷たさだった。

それを振り払うように、理沙はエスカレーターを駆け上がった。デパートの中は相変わらず人が少なく、最上階の寝具売り場は、理沙以外にまったく客の姿は見えなかった。

棚に積まれた寝具を、ひとつひとつ眺めていく。どれも違う商品のはずなのに、その実、理沙にはどれも同じに見えてしまう。端から順に目で追い、最後まで行ってまた戻ってゆくが、どれを選んでいいのか一向に決まらなかった。

何でもいいなら一番安いものと思うが、めったに買い換えるものじゃないから、できるだけ良いものの方がいいのかと別の商品を手取る。しかしまた、隣の商品が気になる。

（私は、どうしてしまったのだろう）

もともとそう優柔不断でもなく、あまり買い物に悩んだこともない。いや、悩むというよりは、心ここにあらずといった感じだった。何を見ても頭に入っていない。

（やっぱり事件のシヨックがあるのかな）

理沙は自分の心が千々に乱れているのを感じていた。

さらに寝具売り場を三往復し、見かねて声をかけてきた店員の勧めるままに、高価な布団セットを購入した。買った布団をカー트에

乗せ、駐車場へと向かう。ガラガラと回る車輪の音が、さびれた店内に空々しく響いた。

なんだか、夢の中を彷徨っているようだった。理沙はひどくのろのろとした足取りで、エレベーターに乗り込んだ。

デジタルで表示されるフロアの数字が、次第に小さくなる。それはまるで、これから起きる不幸へのカウントダウンのようで、理沙を落ち着かない気持ちにさせた。もっとも、その数字は『0』になることはなく、地上を表す『1』で止まったのだが。

車に購入した布団を詰め込み、運転席に座る。エンジンをかけようとして、ふとその手が止まった。

（そういえば、夕飯の買い物もまだだったわね。ここで済ませておこうかしら）

理沙はもう一度車を降り、今出てきたばかりの店内へと戻っていた。

地下の食料品売り場へ行っても、相変わらず買い物に集中できなかった。あれこれ手にとってはみるが、どんなおかずを作ろうか、一向に考えがまとまらない。さんざん悩み、何を買う物かごに入れたのかもよくわからないまま 混みだしたレジを通過して駐車場に出たときには、たっぷり一時間が過ぎていた。

外は早い冬の日没を迎え、すっかり暗くなっている。理沙は駆け足で車に戻り、運転席のドアを開けた。

だが、乗り込もうとして再びその動きが止まる。

（そういえば……）

今度は、何だというのか 脳裏の片隅の冷静な部分が、自らを問い返した。

（今日は急なことで職場にも迷惑をかけたし、お菓子のひとつでも持って行った方がいいのかしら）

それは、半ばどうでもいいことだったに違いない。しかし、理沙は迷うことなく運転席のドアを閉めると、三たび店内へと足を向けた。

面倒くさい。どうしてさっき一緒に済ませてこなかったのか。何  
度も何度も駐車場とデパートを往復して。要領が悪いったらありや  
しない。

心の中で悪態をつきながら、しかし理沙は、自分がちっともうん  
ざりしていないことを感じていた。いや、それどころか、ほっとし  
ている自分がいる。

ほっとしている？ どうして？

一笑に付してしまいたい、ある考え　だが、理沙はついにその  
考えを認めないわけにはいかなかった。

（私は、あの家に帰りたくないんだ……）

先ほど足元に感じた冷気が今度は全身を駆け抜けたような気がし  
て、理沙は思わず身震いした。

## 第八話

家に帰りたくない

それは、昨夜あの家で起きた事件を知っている者であれば、至極当然な感情だと言ったに違いない。自室のベッドに放り込まれた人間の腕。バラバラ死体の一部であろうその腕は、いったい何の目的であんな場所にあったのか。あまりに猟奇的で、謎めいていて、しかも犯人はまだ捕まっていないのだ。

気持ち悪くて、例え愛着のある自宅だとしても、そんなところに帰りたくないと思うのは当たり前だろう。

だが、本当の理沙の思いは、まったく別の所にあった。それほど説明すればよいのか、

「あの家には、幽霊がいるんです」

まるでそんな馬鹿げたことをまことしやかに語るように、理沙の恐怖は誰にも理解されないものに違いなかったのだ。

(そう、私は聖也が、怖い)

(親子二人、寄り添うように生きてきたのに……)

聖也を、疑ってしまう。ひょっとして、この一連の事件は聖也の仕業ではないのだろうか。それは漠然とした考えにすぎない一方で、確信的でもあった。証拠は何もない。それでも、人が侵入した形跡がないのなら、犯人は聖也しかないのではないか。

どうして聖也が、という問いは、不思議と湧いてこない。

男とは思えない、白磁のような肌と華奢な体。つややかな黒髪と、夜の湖のように深く澄み、ときに怪しく光る双の瞳。優しく母親思いで、賢くて、そうして……右腕のない最愛の一人息子。

本当に、そうなのだろうか。本当にそれが聖也の姿なのだろうか。優しい微笑みを湛えた目の奥に宿る、狂気の光り。ときどき垣間見える、あの、理沙を小馬鹿にするような眼差しも、テレビに映る残酷な映像に恍惚とした表情を浮かべるのも。そして、聖也の部屋にあ

った訳のわからぬ鬼畜漫画は……

(私は、何を考えているのかしら)

また、ぼんやりとしてしまった自分に気づき、理沙は自嘲した。立ち尽くしたまま虚ろな表情をしている姿は、相当気味が悪かったのだろう。好奇の目を向けられていることに気づき、理沙は恥じ入るようにそそくさと歩き出した。

歩きながら、そのあまりに現実離れた考えを一蹴する。そう、まったく馬鹿げている。聖也はまだたった十六歳で、高校生で、勉強はできても人生の辛さや世の中の厳しさもわからない子供ではないか。人を殺し、まして腕を切断するなど、その苦しみを身をもつて知る聖也がやるはずがない。

だいたい、そこまで狂気に駆り立てられるどんな理由があるというのだろうか。

理沙はひとりごち、胸中に抱えた得も言われぬ不安と恐怖を無理矢理しまい込んだ。何か大事なことを忘れているような気もしたが、それを思い出すのはなぜかためらわれた。

それでも結局、職場への心付けは買いに走り、車に乗って駐車場を出たときには普段ほどではないにしろ、予定よりもすっかり遅くなってしまうていた。

帰り道はまたも『腕を啜えた犬』に遭遇したところを通ったが、理沙はもう、何も考えないことにした。田んぼの中に建つ神社も、その隣の廃屋も、怖いのに惹かれる妙な誘惑に駆られながら、視線を向けることはない。

やがて車窓から、自宅の明かりが見えた。聖也が帰っているのだろう。そう思うと、いつもはほっとするはずなのに、今日はなぜか背筋に冷たいものを感じる。先ほどしまい込んだはずの、聖也は殺人鬼ではないだろうかという考えが、再び頭をもたげた。

幸せの象徴であるはずのオレンジ色の明かりは、今は地獄へと誘う灯火のように思える。

あの家の中で、隻腕の鬼はどんな所業を企んでいるのか。そう考  
える一方で、その全ては理沙の妄想でしかないこと、聖也はやはり  
心優しい、賢い息子で、一連の不可思議な事件とは何の関係もない  
のだという気持ちもぬぐえない。

それは、理沙が子供の頃感じた、母への一縷の望みに似ていた。  
狂気に支配された母は、今日突然、正気に目覚めているのではない  
だろうか。今日こそは、明日こそは……

そう思いながら、いつも公園で過ごしていたのだった。

理沙ちゃん、ばいばい。また明日ね。

そう言って手を振り、去っていった幼い頃の友達。

うん、また明日。

寂しさをひた隠し、笑顔で見送った理沙。

あれは、そんなに昔のことではないような気がする。聞こえる神  
社の鐘は悪意に満ちて、カラスは不吉な声で嘲笑して、冷たい風は  
耳朶をなぶり、目も耳も塞ぎたくなるような恐怖に震え、寒さに震  
え、そうして気づいたひとつの絶望。

（私が帰る場所は、あの家しかないんだ）

理沙は買い込んだ夕食の材料だけを手に持つと、街灯の光りに誘  
われる夜虫のように、ふらふらと玄関に向かった。

## 第九話

黒い玄関戸の中央に縦長に空けられた採光窓から明かりが漏れている。それはキーシリンダーを回す理沙の手を照らし、その陰影を作った白い指先を、まるで名工の彫刻のように見せた。

鍵が外れる音が、辺りに響く。その音がいつもより大きく聞こえたのは気のせいだろうか。理沙はゆっくりとレバー式のドアノブを押し、玄関をくぐった。

「ただいま」

「あ、おかえり、母さん」

聖也は階下にいた。リビングから姿を現し、いつもと変わらぬ笑顔で帰宅した理沙を迎える。銀縁眼鏡の奥は怜悯な光りを宿す瞳で、この時間になっても、肌は寝不足を感じさせないほどつややかで、白いシャツに紺のカーディガンといういでたちは、あまりに聖也に似合っていた。右腕がないことさえ、その美しさと人々の加護欲をかき立てる要素でしかない気がする。

だがそれは、理沙にはいつまで経っても見慣れぬ姿で、聖也を目の当たりにするたびに事故の事実を突きつけられるのだった。

「ごめんね、遅くなって。何も変わったことはなかった？」

靴を脱ぎながら、理沙は聞いた。

「昼間に変な電話があったのよ。ひよっとして昨日の犯人からじゃないかって、心配してた」

言いかけて、理沙の動きが止まる。その目は、驚きに見開かれたまま、聖也に釘付けになった。

聖也の口元に、淫猥ともいえる笑みが浮かんでいる。その口角は異様な角度にまでつり上がり、なまじ整った顔立ちであるだけに、それは悪魔的な印象を与えた。

「ど、どうしたの、聖也？」

理沙はやっとのことで声を発し、聖也に合わせて笑おうとする。

しかし、頬の一部がひきつっただけで、妙に歪んだ表情になっただけだった。

「変な電話？ 『非通知』で掛けてきた、無言電話のこと？」

嬉しそうに言っ、聖也は喉の奥でひどくいやらしい忍び笑いを漏らした。銀縁眼鏡の奥の目が、すうつと細くなる。どうして無言電話だったと聖也が知っているのか。理沙はその問いを発する前に、すぐにその答えに気づいた。代わりに出た言葉は、恐怖の響きを帯びていた。

「聖也……あなただったの？」

「母さんが怖がるかなと思って」

そう言っ、またも湿った笑いを漏らす。それは幼い子供が、いたずらがばれても悪びれず、無邪気に笑っているようだった。理沙は、今度は怒りが湧いてくるのを感じていた。

「どうしてそんなつまらないことを。この家を犯人が監視しているのかと思っただじゃない」

何がおかしいのか、その言葉に聖也はケタケタと笑い転げた。見馴れぬ息子の姿に、理沙は戦慄して思わずあどずさる。

「犯人が監視してるだっ。本当に気づいてないんだ。ああ、おかしい！ 今さら何を言ってるんだろっね、この人は！」

この人？ 自分の母親に向っ、この人？ それに、聖也は誰に向っ話しているのだろう。だが、それが台詞になっ理沙の口を出るより早く、彼女は悲鳴を上げた。

リビングの奥から出てきた、もう一人の大きな男。

「勇人君！」

それは、理沙も知っている聖也の友人、村上勇人だった。華奢な聖也にくらべ、横幅は倍くらいありそうである。事実、身長は百八十近くあっし、勇人は十六歳にして、紛れもない「大男」であった。四角い顔に無骨な作りの顔立ちは、とても聖也と同級生とは思えない。その勇人の顔にも、聖也と同じような、あまりたちの良くない笑みが浮かんでる。

「勇人君……いつたい、これは……」

訳がわからず、彼らを交互に見比べる理沙。

「聖也、本当にいいのか？」

「ああ、構わないよ」

しかし、そんな理沙を無視して、二人は目配せをかわしている。

そして、聖也の口からありえない言葉が発せられた。

「殺していいよ」

「な……!!」

驚きのあまり、理沙は馬鹿みたいに口を開いたまま絶句した。

「手足を切り落として、ダルマみたいににして、『あの家』に生かしておいてもいいけどな」

勇人の口から、まるで現実味のない残酷な言葉が発せられた。

「勇人の好きにすれば」

そう言って、暗く笑い合う。

「何を言ってるの、聖也。私を殺して、あなたはどうかやって生きていくつもり？ あなたはまだ高校生で、ましてやそんな体で……!!」

「ぼくは勇人と暮らすんだ」

事態を打開しようと喚くように言った理沙の台詞を、聖也はまたも衝撃的な言葉で遮った。

「え……」

今度こそ、訳がわからなかった。聖也は、何を言っているのだろう。聖也はそんな理沙を軽蔑するような目で見て、さらに続けた。

「ぼくは勇人を愛している。勇人も学校を辞めて働くって言うてくれてるし。あなたの顔を見るのは、もうたくさんなんだ」

「あ、あな……あなたは……」

理沙は目の前が真っ暗になるのを感じながら、金魚のように口をぱくつかせた。

「あなたは、自分の言ってることがわかってるの？ ねえ、聖也。お願いだから冷静になってちょうだい。勇人君は男の子、聖也とは

一緒になれないのよ。それに、私の何が気に入らないの？ 言いたいことがあるなら、言ってくればいいじゃない。親子なんですもの。まずは話し合って……」

（私は、何を言っているのだろう）

理沙は顔を引きつらせたまま、現実感のないこの出来事を何とか受け入れようとする。だが、自分の台詞が上滑りし、彼らの耳にまったく届いていないことを感じていた。

聖也はそんな理沙を嘲笑うかのようになり、「話にならない」と言いたげに左手を広げ、天井を仰いでみせた。そうして、次に理沙を見据えたときには、聖也の目は嘲笑とともに憤怒を混じえていた。

「気に入らないこと？ そうだなあ……勝手にぼくの部屋に入ったり」

「それは 今日にはたまたま寝る場所がなかったから、ちょっとベッドを借りただけじゃない」

理沙は必死に反論する。しかし、聖也はそれも聞いてはいないようだった。そうして、次に聖也が発した言葉に、理沙は今度こそ奈落の底に落とされた。

「ぼくを殺そうとしておいて、のうのうと母親づらしていたり……」

理沙の表情が凍り付く。手に持った買い物袋が床に落ち、レタスがゴロリと転がった。しかし、理沙はそんなことにも気づかず、今や見慣れぬ鬼と化した息子をただ呆然と眺めていた。

世界が暗転する。十年前の、忌まわしい記憶。聖也はいつから「知っていた」のだろうか。感じる頭痛は、まるで子供の頃に聞いた神社の鐘のように、悪意を持って響いていた。

## 最終話

\*

「さあ聖也。保育園に行く時間よ」

ゴミの入った白いビニール袋を手に提げ、理沙は玄関先で一人息子の名前を呼んだ。

「はい」

紺の制服に身を包んだ聖也が、パタパタと足音を立てて駆け寄ってくる。このところ別れた夫に似てきたその姿を見て、理沙はかすかな苛立ちを覚えた。小さな手を取り、玄関を出る。

十八で産んで、離婚して、女手ひとつで育ててきた聖也は、今年で六歳になる。仕事をしながらの子育ては本当に大変で、理沙はぶつけどころのない鬱屈をいつも抱えていた。

金銭的に自立しようと選んだ保険のセールスは順調だったが、そうであるほど自分はまだ十分に魅力的で、いくらでも人生をやり直せるのではないかという希望に包まれるのだった。だが、聖也がいては、それも難しいかもしれない。理沙は無邪気に笑う息子を見て、力なくため息をついた。

保育園に向かう途中で、数日の間に溜まったゴミを出す。今日は、週二回のゴミの回収日だった。しかし、いつも通り家を出たのに、なぜか今日はすでに収集車が来ている。

「大変！ 聖也、走るよ」

理沙は焦って駆けだしていった。

「すみません。これもお願いします」

息を切らせながら、大きなゴミ袋を差し出す。夏の収集所は生ゴミが腐乱した臭いを撒き散らしており、理沙は思わず顔をしかめた。「そこ置いといてよ」

無愛想な男の言葉に、理沙はもう一度「すみません」と謝り、袋

を地面に置く。

必死に母親に追いつがってきた聖也は、臭いも気にしないで、ゴミ袋が収集車の中に取り込まれていく様子を興味津々に眺めていた。と、そのとき 理沙の心に、殺意が芽生えた。もし、聖也がいなかったら……

（私は、人生をやり直せるだろうか）

殺意は衝動的だったが、迷いはなかった。生ゴミを食らう鉄の怪物に向かって、理沙は聖也の背中を突き飛ばしたのである。

「ぎゃああああ！」

聞いたこともない凄まじい絶叫が、辺りに響き渡った。

「せ、聖也　！」

一部始終を見ている者がいれば、理沙の声は白々しいほど芝居がかっていることに気づいたかもしれない。そこには、収集車の回転板に右手を巻き込まれ、泣き叫ぶ聖也の姿があった。理沙の目の前で、収集車はまるで猛獣のように小さな体を食らおうとしている。骨が碎ける、鈍い音。

その様子を、理沙はただ呆然と眺めていた。

\*

聖也が一命を取り留めたことは、想定外だった。母親に殺されかけたことを口外するかと思っただが、聖也は事故だと信じているようだった。

理沙は疑われることを恐れて、それまで以上に「良い母親」を演じるようになったし、再び聖也を殺そうとする勇氣は、もう湧いてこなかった。

記憶というのは、思い込むことで改ざんできるらしい。あれは不慮の事故だと思い込み、不具を抱えた息子を育てるけなげなシングル・マザーを演じ続けることで、理沙は息子を殺害しようとした事実を忘れ去った。

いや、正しくは記憶を封印しただけだろうか。心の奥底へと。そして、いつか自らが眠る墓場へと。しかし、封印というのはいつか解けるものだった。

理沙は今、全てを思い出していた。この十年間の聖也への愛情は偽りだったのか、それはすでにわからない。ただ、自分が育ててきたのは人間ではなく、妖魔だということは理解していた。

隻腕の、妖魔。理沙は目の前に立つ聖也を、まるで知らない人を見るような目で眺めていた。

「ねえ、勇人。やっぱりこの人にもぼくと同じ絶望を味わわせてあげたいな」

聖也はまるで淫婦のように、勇人に寄り添い鼻を鳴らした。それはおぞましくも妙に倒錯的で、理沙はこの期に及んで聖也の姿に見とれていた。

「じゃあ、『あの家』に運ぶか」

「昨日の女もよかったよ。鼻水垂らして、泣き叫んでさ。腕を切り落としたら、おしっこ漏らして失神しちゃったけど」

「ったく、聖也は悪趣味だな。手足を切り落として、そのまま生かす続けるなんて」

「だって、あの絶望に怯える表情はたまらないよ！」

恐ろしいことを言いながら、聖也は恍惚として目を輝かせていた。「わかった、わかった。俺は聖也を喜ばせるためなら何だってやるよ」

目の前で交わされる、悪魔の会話。勇人が、何やらハンカチのようなものを握りしめて近づいてくる。しかし、理沙はまるで足だけが石像と化したように、その場から動けないでいた。

この十年間は、何だったのだろうか。聖也への殺意はほんの一瞬の出来心で、今となってはあのと殺さないでよかったと思っっている。それとも、やはり死んでしまえばよかったのだろうか。平和で、満ち足りた日々だと信じていた毎日、この家で繰り広げられた、ただの道化芝居でしかなかった。

（私が『良い母親』を演じてきたように、聖也もまた『母親思いの息子』を演じていた）

（でも、それを非難する権利は私にはない）

勇人がハンカチを口に押しつけてくる。しかし、理沙はそれに抵抗することはなかった。鼻腔に感じる刺激臭。遠のく意識の中で、理沙は偽りの人生を走馬燈を眺めるように振り返っていた。

……

理沙が目を覚めたのは、血生臭い、何ともいえぬ腐臭が漂う闇の中だった。畳の上に置いた一枚板の上に仰向けのまま大の字に手足を固定されているようで、身動きができない。服はすべて脱がされ、芯から冷えるような寒さに身を震わせた。何かの薬で無理矢理眠らされたせいか、頭が重い。

「あ、目を覚ましたみたいだよ」

頭上から、聖也の声が聞こえた。暗闇に目が慣れてくると、景色がぼんやりと見えてくる。剥がれた壁紙に、和室を思わせる天井。どうやら家の中らしい。理沙をのぞき込む聖也の顔が、目前にある。

「ここは……どこなの？」

醒めやらぬ、ぼんやりとした頭で理沙は言った。

「神社の隣の廃屋」

同じようにのぞき込んで低く答えた勇人の言葉に、理沙はもう驚かなかった。すべては、理沙が妄想したとおりだった。二人はここで、罪のない人々をとらえては悪鬼のような所業を行っていたのだろう。そう考えて、理沙は少し可笑しくなった。いったい悪鬼の所業とはどんなものか。しかしそれは、これから理沙が身をもって知ることになるはずだった。

それを証明するように、勇人は理沙の右の二の腕を、ロープのよなもので力一杯締め付けた。早くも腕が痺れてくる。

「喚かれちゃたまらねえからな」

そう言っつて、次に猿ぐつわを噛みます。

「喚く声も聞いてみたいけど」

聖也の顔に、暗闇でもわかるほど凄惨な笑いが浮かんでいた。

「あのとき、ちゃんとぼくを殺しておけばよかったね。そうすれば、男のアレ啜えて喜ぶようなカマの息子なんて知らずにすんだのにね。手足を切り落として、芋虫みたいな人間を作って狂喜するよ。うな頭のおかしい人にならなかったし、こうしてあんたも殺されることなんてなかったのに」

興奮しているせいか、いつもよりトーンの高い聖也の声は、もはや別人のように聞こえた。十年前のあのとき、理沙は確かに聖也を殺したのかもしれない。右腕をなくし、病院で目覚めた六歳の子供は、すでに小さな悪魔でしかなかったのだ。それとも、この十年が聖也を変えてしまったのか。

（私は、何を求めてきたのだろう……）

幼い頃から、ずっと求め続けた幸せ。気違いの母から逃げるように結婚して、聖也が生まれて、そうして

「ねえ勇人、切った腕はまた犬の餌にしてやるうか」

「あんまりやると、そのうち警察に目をつけられるぞ」

「大丈夫だよ。それより、早くやってしまおうよ」

聖也は興奮し、これから繰り広げられる惨劇にうっとりとしていた。

「じゃあ、やるか」

そう言っただけで勇人が持ってきたのは、薪を割るような大きな斧だった。それを目の当たりにした理沙の目が、恐怖に見開かれる。涙が止めどなく溢れた。やがて右腕を狙い、ゆっくりと振り上げられる巨大な斧。

それほどの恐怖を前にしても、縛り付けられ、猿ぐつわを噛まされた理沙には、抗うすべはなかった。

勇人の口元に、悦楽も、ためらいもないアルカイックな笑いが浮かぶ。

（許して！ 許して！ 許して！）

しかし、その祈りは聞き届けられないことはない。次の瞬間、闇の中で鈍い光りを放つ鉄の斧は、まるで神の鉄槌のように慈悲もなく下された。

「……………！」

理沙の口から、声にならない絶叫がほとばしる。何か爆ぜるような音とともに、理沙の腕は体を離れ、血を撒き散らしながら埃まみれの畳の上に転がった。

激痛に悶絶しながら、理沙はすでに自分のものではなくなった『腕』に目を向けた。断面から流れる血が、大きな染みを作ってゆく。白く、蠟人形のように冷えてゆく理沙の腕は、手にするはずだった幸せがすり抜けたように、虚空を指さしていた。

聖也はそんな肉塊と化した『腕』を拾い上げると、狂ったような笑いを発した。

《了》

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1131n/>

---

かいな

2010年10月14日13時09分発行